

緊急消防援助隊、新潟県隊だけでも五百数十人救出 東日本大震災被災地へ上越地域消防事務組合からも六十余人を派遣

3月28日、上越地域消防事務組合本部を訪問してきました。今回の東日本大震災では、いろんな団体の人たちが被災地で活動しています。上越地域消防事務組合から派遣された緊急消防援助隊員の皆さんも被災地で頑張っていることを知りました。（写真は消防組合本部提供）

第1次派遣隊が出発したのは、3月11日の午後6時59分。消防部隊5名と救助部隊5名という構成でした。新潟県内からは30隊、141名が派遣されたといえます。活動地域は宮城県石巻市、女川町及び周辺地域です。12日から14日までの3日間の間に、火災出動、人命検索、救出、被害状況調査などの活動をしてきました。救出した住民数は新潟県隊全体で556人にのぼっています。

これまで上越地域消防事務組合から派遣された職員は第1次派遣隊から第6次派遣隊まで合



わせて64名です。第2次派遣隊からは救出数がぐんと減り、救急、遺体搬送の仕事がほとんどですが、命を救うために懸命の活動をしているとのことでした。人命検索などの活動では、水に浸かることも度々とか。野営テントの中で濡れた衣類を乾かし頑張っているそうです。

総務常任委員会も大島・安塚視察

3月25日、市議会総務常任委員会は長野県北部地震被災地の視察を行いました。訪れたところは、私たちの党議員団が訪れたところと同じく、大島区菖蒲と安塚区和田の安塚やすらぎ荘と須川のキューピットバレイです。

このうち最初に訪問した大島区菖蒲では、集落のセンターで総合事務所の幹部と地元町内会長さんから被害状況を説明してもらいました。最新の大島区被害データでは、全壊6（うち

非住家5）、大規模半壊1、半壊1、一部損壊125（うち非住家9、その他6）。建築物が使用できるか否かを応急的に判定する被災建築物応急危険度判定結果では、赤（危険）は9、黄（要注意）29、緑（調査済）6、となっていました。

総合事務所で用意された資料には写真がたくさん掲載されていました。全戸を調査したなかで作成されたものだけにとっても参考になりました。

町内会長さんは、「地震の



時にはこのセンターに4時10分には来た。余震も下からどんと来た。（雪が崩れ落ちて）道を歩くのも危険な状態だった。とにかく震度計を設置してほしい。田んぼは亀裂が入っているのではないだろうか。雪解け後が心配だ。いま水道は仮設（仮復旧）だ。雪が消えたら早めに本格的な復旧に尽力願いたい」とのべておられました。

調査に参加したのは総務常任委員会のメンバーですが、震災後初めてだった人も何人かいたようです。予想以上の被害と雪の多さにびっくりしていました。この日に寄せられた要望は市議会各派代表者会議で整理して関係部局に伝えていくことを確認しました。写真は大島区菖蒲地内で被災した家です。



【オウレン】キンポウゲ科。春の早い時期に白い花を咲かせます。漢字で黄連と書きます。吉川区代石の善長寺境内で見つけました。健胃、整腸薬として消化不良や下痢止めに用います。

ずっと気になっていました。二十日ほど前、散歩していた時に見つけたドングリの実がどうなったかです。そろりと見に行こうかと思っていたある日のこと、源中学校の大先輩であるKさんが声をかけてくださいました。

「ねえ、橋爪さんで、前にドングリのこと書きなつたよね。孫がね、ドング리를育てているんだね……。見なる？」Kさんは、ニコニコしながら私にきいてこられました。もちろん、私は即座に「見たいです」と返事をしました。

私が書いたドングリの話というのは、この随想「春よ来い」に書いた「ドングリのあてっこ」です。Kさんは、この話のなかで私がドング리를使って一緒に遊んだ同級生のお姉さんでもあります。

しばらくしてKさんは、お孫さんが育てているというドング리를玄関先まで持ってきてくださいました。見た瞬間、「うわっ、これはたいしたもんだ」と声を出してしまいました。ドングりが空き缶の中で根を生やし、緑色の柔らかな葉をつけていたのです。それもふたつも。空き缶の縁にはドングリの実の割れたものが外にたれさがり、缶の中には毛の生えた根が下へ広がっていました。根の色は白っぽいものだと思ったら、薄茶色になっていました。そして根の元からは将来、幹となる茎がすくつと上へ伸びていたのです。

Kさんから葉のついたドング리를見せていただいた思い出したのは、散歩の時に見つけたドングリです。「ひよつとすると、あのドングリも芽を出しはじめたかも知れない」そう思ったのです。

数日後、私はドング리를見つけた場所へ行ってみました。二十日ほど前には、雪消えが進んでいた山際の一角にいくつかのドング리를見つけたのですが、いま、その山際ではすっかり雪が消え、雑木林の中もほとんど雪がありませんでした。

ドングリは思っていた以上にたくさんありました。少なくとも、五〇個や六〇個は落ちていたと思います。ただ、ざっと見たところ、Kさん宅で見たような葉は見当たりません。「まだか」そう思っただけでちよつぱりがつかりました。

ところが、腰を低くして一つひとつのドング리를観察しはじめたところ、ハッキリと変化してきていることに気付いたのです。前に見た時とまったく同じく、秋のドングリの姿そのままのものもありましたが、ドングリのとがった部分から殻を突き破り、根らしきものを伸ばしているものがありました。

根を出しているドングリの姿は様々ではありませんでした。根を出しはじめたドングリの多くは、根の色が黒くなって枯れています。おそらく、氷点下まで冷えた時か雪が降った時に凍ってしまったのでしょう。

今年の冬は天候も大地も異変続きでした。春先も雪が一五センチも降ったり、五ミリほどの大型の雹（ひょう）が降ったりしました。何が起きるかわからない中で人間も動植物も必死に生きています。ドングリも例外ではありません。

そういうなかで、二つに割れた実から根を出し、土の中に入り込ませているものが数個ありました。少し赤みがかっている実から出た根も同じ色となり、土としっかりつながっています。そして、根元の部分はさらに変わろうとしています。茎立とうとしていくのです。この調子でいけば、数週間後には葉のついたドングリの姿が見られるかも知れません。うれしくなりました。

基礎データは旧市町村ごとの整理も必要

3月11日の市議会総務常任委員会で私は、今後の政策づくりを進めるうえで基礎データを旧市町村ごとに整理しておくことを求めました。市側は、「地域ごとの整理はなかなか難しいところがある。しかし、課題意識は持っているので、少し腰を据えて基礎データをどうしていくか検討していきたい」と答えました。



14市町村が合併後、政府関係から求められる各種調査はほとんどが市域全域でデータをとっています。そのため、人口減少問題ひとつとっても旧町村ごとにどんな変化が起きているのかをつつこんで分析できないのが現実です。昨年10月に発行された「上越市の商工業」でも合併前上越市の区域と13区合計の数値は示されてはいるものの、各区の数値はありません。これでは、今後の政策づくりは一般的なものになってしまい

がちとなります。

私は地域経済研究者の発言を紹介しながら、今後の基礎データ収集のあり方を変えないと政策づくりは具体的な、いいものにならないと強調しました。

米粉をすぐに作れるシステムを

3月10日の市議会文教経済常任委員会では農業分野の審査が行われました。新年度予算では上越市産米粉利用促進事業交付金が新年度85万円計上されました。委員会では米粉の利用促進をめぐる様々な意見や提案が出されました。

柿崎区で農業を営む武藤正信議員は、「米粉も使えるパン焼き器が話題になっている。JAの幹部の話では、500万円ほど金をかければその日のうちに米粉ができる機械を導入できると聞いている。米をすぐに米粉にできるシステムを」と訴えました。

上野公悦議員は頸城区で米粉を使ってカステラづくりに挑戦している成功させた事例を紹介し、「(米を加工し、商品をつくる)研究開発に支援したらどうか」と提案しました。担当課長は、「ケーキ屋さん、麺業者のみなさんなどを後押ししていく必要がある。平成23年度は麺の中に米粉を活用することをメインにしていきたい」と答えました。